

パレア9階情報ライブラリーでは、男女共同参画、生涯学習、NPOに関する図書などの貸し出しを行っています。どうぞお気軽にお立ち寄りください。

木のストロー

西口彩乃 著
扶桑社 出版



住宅会社の広報担当者が「環境保全やSDGsを達成するために“家を作り売る”こと以外、何ができるのか？」を考えた開発実話です。地元の間伐材を使い、地元の障がい者施設に製造を依頼し、そして地元の企業が購入して使用するという環境と地産地消とSDGsを見据えたビジネスモデルです。

365日 #Tシャツ起業家

「食べチョク」で食を豊かにする農家の娘

秋元里奈 著
KADOKAWA 出版



やりがいを感じてIT企業に勤めたものの、自慢だった実家の農地が荒れ果てているのを目にし、生産者が報われる社会を作りたいと思いを募らせます。その思いは生産者と消費者をつなぐオンライン直売所「食べチョク」の設立につながります。どのような過程で起業に至ったのかが分かる成長ストーリーです。

ワンピースで世界を変える!

専業主婦が東大安田講堂でオリジナルブランドのファッションショーを開くまで

フローレンチ智世 著
創元社 出版



服作りに素人だった専業主婦が、男性的な骨格の人も着こなせるかわいい洋服ブランド「フローレンチ」を立ち上げ、東大でファッションショーを開くまでの起業奮闘記。資金難や幾多の困難にも立ち向かえたのは「誰もが着たい服を着られる世の中に!」という熱意があったから。その情熱を届けます。

すべては地球の未来のために

株式会社スター・フローレス代表取締役社長の星子桜文さんを講師に迎え、「すべては地球の未来のために」と題したセミナーを7月2日、くまもと県民交流館パレアで行いました。会場・オンラインのハイブリッド開催に74人が参加。内閣府が社会問題の解決に取り組む女性に贈る「女性のチャレンジ賞」を受賞されたばかりの星子さんに、起業に至る経緯や環境問題などについて話を聞きました。

「起業するつもりなどさらさらなかった。環境の問題も国の偉い人がなんとかしてくれると思っていて、自分に何かできるかと思っていなかった。ただ便利な暮らしと引換えに、どんどん変わってしまう自然が寂しかった」。バイオディーゼル燃料(BDF)精製事業に携わる星子さんは起業の経緯をそう語ります。病弱だった星子さんは幼少期を山鹿の祖父母の家で過ごします。乱舞する蛍を捕まえ蚊帳に放し眠る。自然美溢れる日常は、星子さんの活動の原点を築きました。BDFとの出会いは2002年、当時働いていた運送会社で取引先の車の排気から天ぷら油の匂いがしたことに始まります。BDFは大豆や菜種などを原料とする使用済油を再利用して作られるため環境に優しい燃料ですが、家庭から出る廃油の9割は捨てられ、

回収さえされていないのが現状です。BDFに深く感銘を受けた星子さんは職場に直談判し、BDF製造部門を設立します。ところがやっこの思いで技術が確立してきた頃、会社が倒産。技術だけは何とか継承したいと企業をあたかも儲からないという理由から全てに断られます。「処理方法に困る廃油が巡り、地球に優しい燃料に生まれ変わる。ましてや資源の少ない日本の大切な資源なのに、儲からないという理由だけでは諦められない。誰もやらないなら私がやる。私はどうしてもこの燃料を作りたかったのです」。倒産から一カ月後の2010年4月、資本金50万円、一人株主でのスタートでした。BDFはエネルギーを自分たちで作れるのが最大の魅力と話す星子さん。廃油を地域で集め、生まれ変わったエネルギーを地域で利用する。そんな地産地消・地域循環のエネルギーは、誰もがすぐに環境問題に取り組める社会貢献エネルギーでもあります。「やさしいことからいい、未来のためにできることを一人一人が行動に起こすことが重要なのです」と強く呼び掛けました。

参加者からは「温暖化の加速を1秒でも遅らせるために自分にできることをやりたい」などの感想が寄せられました。私たちの少しの行動はさざ波ですが、未来で大きな波となる、そう強く感じるセミナーとなりました。



講師 星子 桜文さん
(株式会社スター・フローレス 代表取締役社長)
熊本県出身。2010年バイオディーゼル燃料の精製・販売会社「自然と未来株式会社」を設立。2013年、第22回くまもと環境賞、地球温暖化防止活動環境大臣表彰を受賞。2016年環境問題に取り組む企業・個人のコンサルティング、製品の普及販売を行う「株式会社スター・フローレス」設立。2019年「一般社団法人高純度バイオディーゼル燃料事業者連合会」設立、代表理事。

「四賢婦人物語」に学ぶ

～時代を切り開いた矢嶋姉妹 その④
文・齊藤 輝代

幕末の頃、益城町の矢嶋家に誕生した四姉妹、竹崎順子、徳富久子、横井つせ子、矢嶋楯子。自ら行動を起こし、男女平等社会の礎を築くことに尽力した四賢婦人にまつわるストーリーを紹介します。

老若男女共同参画社会の先駆け
順子と楯子の晩年の生き方

竹崎順子は、73歳で熊本女学校校長となります。経営の苦しい女学校を守り、「校母」と慕われながら81歳で没するまで現役でした。若き教師陣をまとめながら、女子生徒を自立した未来へと導くことが順子の生き甲斐でした。

順子の後を引き受けたのが、留学から帰国し京都に産婦人科院を開業していた福田令寿でした。順子が亡くなる前年12月に氏は順子の病床を見舞っています。後年、氏は次のように語っています。「義侠心でも言いますか。女学校は自分が教育してもらった英学校の片割れでもあるから、なんとかして立ち上がらせたという念願から」。明治19年に徳富久子が趣意書を書き、女子教育の必要を訴えて以来、姉の順子に守られ、明治38年、32歳の若き令寿へと、熊本女学校は引き継がれたのです。

争終結のお礼を述べています。この時サンフランシスコから通訳として同行したのが、久子の孫の大久保落実。まだ学生でした。楯子に代わり壇上で堂々と演説をしました。後に楯子の後継者となります。

大正2年、80歳の楯子は女子学院院长を辞し名誉院長になります。その後、矯風会会頭として、全国を回り支部設立を進め、会の基盤を固めます。80代後半の楯子は、命を懸けて世界へと飛び出します。

矢嶋姉妹は、女性の自立を願い、全ての人々にとって生きやすい社会の実現のために命尽きる時まで働きました。郷土の偉大な先達として、多くの示唆を与え続けています。

人生百年時代を迎えました。70歳からの時間をどう生きるか。わくわく元気に生きていきたいものです。

※矯風会…禁酒運動をもとにアメリカで設立されたキリスト教の婦人団体を、矢嶋楯子らが明治19年に日本で組織。世界の平和、性の尊厳と人権の保護、未成年者の禁煙・禁酒を活動目的とする。

令和4年度 内閣府
男女共同参画社会づくり功労者
内閣総理大臣表彰

内閣府では毎年、男女共同参画社会づくりに向けた取り組みを加速するため、多年にわたり男女共同参画社会に向けた気運の醸成などに功績のあった人や、各分野において実践的な活動を積み重ね、男女共同参画の推進に貢献してきた人に対し、内閣総理大臣による表彰が実施されています。今年度は、熊本大学名誉教授の鈴木桂樹さんが受賞しました。



鈴木桂樹さん(熊本大学名誉教授)
1955年福井市生まれ、大阪育ち。1987年に熊本大学に赴任。2021年3月定年退職。日本政治学会会員。共著に、『ジェンダーと政治過程』(木鐸社)、『現代イタリアの社会保障』(旬報社)など。